

編集後記

北海道有珠山，伊豆諸島三宅島の噴火，地殻変動と日本列島も落ち着かぬ日々が続いたが，消化器外科学会も年一回の学会総会開催，認定医，専門医制度さらには当学会誌の改革など大きな変革の年となった．これらのことは二十一世紀に向けての学会の方向性，あり方をも問う重要な問題であり，今後とも会員全員が関心を持つ必要がある．学会誌に関しては英文誌との collaboration の問題は安易に解決すべきではなく，邦文誌のあり方を含め学会も pride を持って対処すべきと思う．邦文誌も以前からの原著，症例報告，研究速報の項に加え数年前から臨床経験を採り入れ，今後は総説，提言の項が加わり，より会員に有益な hot な学会誌に向かって進もうとしているが，これがうまく機能するためにはやはり会員諸氏の多くの協力が必要であることは言うまでもない．

さて，今月号は私の知る限り初めての原著無収載号となった．症例報告14編，臨床経験2編，研究速報1編の構成である．原著投稿の減少の件は本編集後記にもさまざまの形で取り上げられているが，これを打破するうまい idea はないものか？編集委員の一人としては投稿者は基礎的な方法論にとらわれず，多方面からの新しい approach の臨床研究をどしどし投稿してもらいたいと願っている．先日の抄読会にて若い教室員が The New England Journal of Medicine の本年度巻より Cardiopulmonary resuscitation by chest compression alone or with mouth-to-mouth ventilation というタイトルの原著を紹介した．内容は救急隊の到着まで一般市民による救急蘇生を上記の2種で比較した論文であったが，論文構成は prospective study であり，疑問点を持たば常識を打破する研究材料は臨床現場に転がっていることを示すものではないかと思う．若い会員の感性に大いに期待するしだいである．

(熊谷一秀)